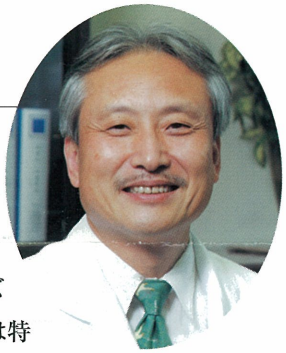
mizuki みずき
大阪医科大学附属病院 病院医療相談部
病診連携室ニュース／2006年1月発行
VOL.3 第3号

年頭の辞

病院長
竹中 洋



新年おめでとうございます。皆様はどのように新しい年をお迎えになられたでしょうか。我々も年頭に当たり初心に帰って医療の提供を考えております。

大阪医科大学附属病院はその理念に、「地域社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆様に提供するとともに、良識ある人間性豊かな医療人を育成します」と謳っています。具体的に文言を吟味したいと思います。地域社会のニーズですが、医療に係わるニーズは地域によって異なるものと、同じものがあります。三島医療圏を中心とした京阪神で、本院は特定機能病院として、最も機能分化された病院であります。患者様お一人お一人を直接診察すること以外に、診療所や市中病院から果たすべき役割を求められています。それが、安全で質の高い医療なのです。質の高い医療技術を具体的に限定することは困難ですが、例えばがんや動脈瘤破裂のような、生死に係わる病気に渾身の力を込めて対応し、なおかつ他施設に劣らない治療成績と満足が得られることが必要です。それを担保するものが安全です。幸い本院では病院職員一同の不断の努力により、重大な医療事故は起こっておりません。慢心することなく今年も精進して参ります。

本院のもう一つの特徴は、大学附属病院として教育や臨床研究を義務づけられているところです。大学には600名の医学部学生が所属し、附属看護専門学校にも200名を超える看護学生がおります。彼らはあすの日本の医療の担い手であり、我々の看取り者であります。医療の現場に親しく立ち続けることで、これら学生の職業人としての将来は開けて参ります。本院をご利用頂く皆様には、ご理解をお願い致します。また、本院では治験や治療成績の検討などの臨床研究にも積極的に取り組んでいます。これはエビデンス（成果）として将来の皆様に還元される部分であります。良識ある人間性豊かな医療人を育成することや臨床研究に取り組むことは、将来の医療を充実させ、その果実を市民に提供することと我々は考えています。

さて、医療制度改革によって医療の周辺にざわついた雰囲気が漂っています。我々は先に掲げた理念に沿って今年も努力を続けて参ります。ご指導のほどをお願い申し上げます。

平成18年年頭のご挨拶

病院医療相談部部長
花房 俊昭

皆様あけましておめでとうございます。昨年中は大阪医科大学附属病院病院医療相談部および病診連携室をご支援いただきまして、まことにありがとうございました。本年も昨年に引き続き御指導を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

昨年は、当院の新しい病棟である7号館が稼働を開始し、地域の先生方から御紹介をいただいた患者さまにもすでに多数ご利用いただいております。1～3階に内科外来、産婦人科外来、眼科外来が移転したのをはじめ、4階から上にはセンター化した病棟が入っております。7号館の特色として、各病棟をセンター化することにより、高度な医療を実現する場を皆様に提供させていただくとともに、患者さまから見てわかりやすい病院となることを目指しております。また、病室をご利用いただく患者さまの療養環境という面でも、大幅に改善されたのではないかと考えております。今後は、地域に高度な医療を提供する象徴としての7号館を通じて、皆様方と当院とのより緊密な医療連携が図れるよう努力してまいりたいと存じます。

また、現在病院の2階にございます病院医療相談部が、今年の春には1階の病院玄関横に移転する予定です。今まで来院される皆様から、相談部の場所がわかりにくい、というご意見を少なからずいただいておりましたが、今年からは病院に入ってすぐ目につく場所に移転することになり、名実ともに「病院の顔」として、病院の第一線で皆様をお迎えできる体制が整うことになります。それだけに、今まで以上に皆様方に喜んでいただけるような仕事をしなければと肝に銘じております。

今年一年が皆様にとりまして素晴らしい一年となりますよう、私ども一同、できる限りのお手伝いをさせていただきたいと存じます。しかし、私どもの至らない面もまだまだ多々あることと存じますので、どうぞ忌憚のない御意見をご遠慮なくお寄せ下さいますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

mizuki news

新講義実習棟完成にあたって —新棟の紹介—

総合企画部　参事・建築担当部長
岩本　暢泰

●新講義実習棟外観

●躯体鉄筋工事　今世間を騒がせている建物構造の安全性については、構造計算書の精査をはじめ、施工の各段階において設計者、施工者、施主の三者による配筋検査を必ず実施しました。したがって、建物の耐震性能にはまったく問題ないことを確認しております。

●大教室（1階）
最大198名が着席でき、市民講座、学会、式典など多目的に使用できます。

●講義室（3階）　最大135席、同117席の二つの講義室があり、両部屋の机にはノートパソコンが配置されており、PCを使った授業や試験（CBT）にも対応が可能となっています。

●大ロッカールーム（2階）　1年生から6年生まで同じロッカーを使用し、鍵はダイヤル式になっています。
●教育センター（4階）
●小教室（5階～7階）　5・6・7階とも同じ配置で、1フロアー15室、合計45室のグループ室を設けています。
●多目的スペース（8階）

今から約4年前、大阪医科大学PA会（保護者会）より「新規に学生講義実習棟（仮称）を建設してほしい。」旨の申し入れが本学法人宛にありました。理事会で審議のうえ承認されましたので、直ちに建築委員会（委員長は学長）が設置され本格的な検討が始まりました。（かかる経緯により、新築される建物のことを通称PA会館と呼称するようになりました。）しかし、本部キャンパス内の容積率が不足するため、どこかを解体撤去しなければならない、建築場所はどこが最適かなどの問題があり、階高・延べ床面積などの建物本体の設計についても二転三転の曲折を経てようやく最終の実施設計書が出来上がり、昨年（平成17年）1月21日（金）に地鎮祭を挙行し、建設工事に着手することができました。

建設場所は、既設棟との兼ね合いを考慮して、現在の講義実習棟の東側に隣接（2階部分を渡り廊下で接続）して建設されました。建物の概要は、鉄筋コンクリート造りの地上8階建て、高さ約30m、延べ床面積が約4,500㎡（1,360坪）規模で、約1年を費やして完成しましたが、これは非常に厳しい短期間の工期の中、設計監理者と工事施工者が一体となって、大学の建物としてふさわしい品質を確保するために、卓越した設計・施工技術力を集約して工事の完成に尽力されたことによる好結果であります。

また、この新棟のコンセプトは、「①高次元の学習に専念できる良質な環境を提供すること。②地域環境に配慮した高品質な建築物であること。③高度なIT化を視野に入れた先端的な講義棟であること。」に集約されており、それらを具現化すべく、620人分（男女比6:4の可変型）の大ロッカールーム、合計45個の小教室（グループ室）、コンピュータ実習室などの各施設の設置が本新棟の特徴と言えます。LAN,ITなどのインフラ整備も整い、全体的に明るく居住性は頗る良好で、要となる教育センターの棟内設置により、これまで以上の教育環境が整いました。

この度の新講義実習棟の完成により、「高い知性と豊かな感性を兼ね備え、変化する社会に積極的に対応しえる能力と、生涯を通じて最新の医学的知識を取得し最高の医療を保持しようとする意欲を有し、最善の医療を目指す、創造性に富む医療人を育成する。」という教育理念を実現するためのPBL（問題解決型授業）,CBT（コンピュータ上での共用試験）,OSCE（客観的臨床能力学習）などについて積極的に導入できる環境が整備されたことになります。

topics

消化器内科の展望

大阪医科大学附属病院
消化器内科　科長
島本　史夫
昭和54年本学卒業
専門領域は食道・胃・腸疾患、
高齢消化器疾患

消化器内科は、食道・胃・十二指腸・小腸・大腸・腹膜に関する疾患を対象とする胃腸科、肝臓・胆道・膵臓に関する疾患を対象とする肝胆膵科、および消化器癌化学療法を行う化学療法科から構成される診療科です。消化器内視鏡センターと密接に連携して診断・治療に携わっています。この度、第二内科平田一郎助教授が藤田保健衛生大学消化管内科学講座教授として平成17年11月1日付けで赴任され、後任として消化器内科科長に第二内科助教授島本史夫が就任いたしました。

消化器内科は、消化管・胆道・膵臓疾患に対する安全且つ積極的な内視鏡診断・内視鏡治療の施行、肝炎・肝癌に対する抗ウイルス治療・集学的治療の充実、根治的治療困難消化器癌に対する延命・緩和を目的とした抗癌剤治療などを特色とするとともに、高齢社会を反映した高齢者消化器疾患にも対応すべく体制を整えています。

1 胃腸科

消化器病専門医・消化器内視鏡専門医・大腸肛門病専門医などに認定されている常勤スタッフは15名です。

上部消化管内視鏡検査は年間に約5000件、下部消化管内視鏡検査は約2000件、内視鏡的粘膜切除術は約400件、その他に止血術、食道静脈瘤硬化術・結紮術、胃瘻造設術、異物除去などの実績があります。難治性逆流性食道炎や再発性胃・十二指腸潰瘍に対する治療、潰瘍性大腸炎やクローン病に対する新しい治療法導入、吐・下血などに対する緊急内視鏡検査・治療、大腸ポリープ内視鏡的切除のための短期入院治療などが積極的に行われています。超音波内視鏡検査など最新の検査法を導入して、消化器癌の早期発見、侵襲の少ない内視鏡治療の実施に努めています。定期的に消化器外科とのカンファレンスが開かれ、手術適応症例の検討や術後症例の検証を行い、より質の高い医療を目指しています。機能性胃腸症や過敏性腸症候群などの機能性疾患の治療に対しても積極的に取り組んでいます。

2 肝胆膵科

消化器病専門医・消化器内視鏡専門医・肝臓専門医・超音波専門医などに認定されている常勤スタッフは7名です。

肝炎ウイルス関連疾患に対するトータルケアとして、肝硬変・肝癌への進展を防ぎ、肝癌の早期発見による根治治療、進行癌に対する集学的化学療法を導入しています。

胆石、胆嚢炎、膵炎、胆嚢・胆管癌、膵癌などの胆膵疾患に対しては、ERCP、ステント留置など内視鏡診断・治療を中心に、最新の画像診断のもとに統合的治療を行っています。

3 化学療法科

腫瘍内科医の常勤スタッフは4名で、日本臨床腫瘍学会認定研修施設となっています。

進行性の食道・胃・大腸癌に対する延命治療と緩和治療を目的とした標準的抗癌剤治療を行っています。外来治療を中心とした治療や、ホスピスを含めた在宅看護などの相談にも応じています。最近では、セカンド・オピニオンの希望も増加しており、現在開発中ながら効果の期待できる治験薬の使用を含めて、日本および世界の最先端治療を提供・紹介できるように努めています。

4 高齢者消化器病

日本老年医学会認定の老年病専門医は2名（勝健一教授、島本史夫助教授）です。

65歳以上の高齢者の割合が20%に達し、高齢者消化器疾患も増加しています。高齢者には腹部膨満感などの消化管運動低下による症状が多く、生活習慣病の増加に伴い糖尿病進展と胃潰瘍発生や胃運動機能低下に相関があるとされています。呼吸・循環器系疾患を有する高齢者の内視鏡検査時の心肺偶発症発生頻度や、NSAIDs内服後の高齢者に急性胃潰瘍発生頻度が高くなります。高齢者消化器疾患を診断・治療する場合は消化器内科単独ではなく、各診療科との密接な連携が必要で、総合的ケアを念頭に、より高度で、且つ配慮ある診療を行ってまいりたいと思います。

Quality of Lifeを維持するためには健全な食生活が大切で、そのためには消化器疾患の早期診断・治療とともに地域医療と連携した生活指導・教育が重要となります。遠慮なくご相談、ご紹介ください。

mizuki information

遺伝カウンセリングのご案内

外来・入院患者さまを対象に平成14年6月から実施しておりましたが、今回パンフレットを作成し、本格的に始動いたしました。

遺伝カウンセリングとは

遺伝、遺伝子に関する問題に、もっとも新しい医学および遺伝学の知識をもとにして、専門の医師の遺伝カウンセラーがわかりやすく納得のいくように説明し、相談者の立場に立って解決法を一緒に考えます。

※診察、検査、治療は行いません。

申し込み方法

完全予約制ですので、お電話にて病診連携室にお申し込みください。

料　金

初回 8,000円（消費税込み）　1時間～1.5時間

2回目以降30分3,000円

※健康保険適応外で、全額自費になります。

遺伝カウンセリングを受けるにあたって

- 正確な病名あるいは病状等を、現在かかられている医療機関の主治医から聞いて、できるだけ明らかにしておいてください（遺伝性疾患にはよく似た名前であっても、症状や予後が全く異なる疾患がたくさんあります）。
- 現在かかられている医療機関の主治医に、遺伝カウンセリングを受けることを話す必要はありません（ただし相談内容によっては、相談者の承諾を得た上でカウンセラーが主治医に病歴や検査結果について問い合わせをする場合があります）。
- 簡単な家系図をあらかじめ書いておいてください。
- 電話だけでの相談には応じられません。
- 相談内容・個人の秘密は厳重に守られます。

お申し込み・お問い合わせ先

病院医療相談部・病診連携室

TEL（072）684−6338（直通）

病院医療連携活性化対策事業のご案内

当事業は、紹介医師と本学医師との交流を目的とし、平成14年にスタートしました。紹介患者様の診断・治療・予後などを話し合うことはもとより、最新の話題の提供の場をもつことでお互いの診察能力の向上を目指しています。

＜内容＞

症例の分析、成績、貴重例報告、特別講演、教育講演など

今までに6回開催され、多数の先生方にご参加いただきました。今後の開催につきましては、病院医療相談部のホームページにお知らせを掲載する予定です。先生方のご参加をお待ちしております。

大阪医科大学附属病院ホームページアドレス　http://hospital.osaka-med.ac.jp/

編集後記

新年明けましておめでとう御座います。

昨年は「病院機能評価の認定」「7号館のオープン」「大学格付」等、本院にとって節目となる一年でした。

さて2006年はと言いますと、持株会社「日本郵政株式会社」の発足、トリノ冬季オリンピック・FIFAワールドカップドイツ大会の開催、神戸空港開港とその他にも様々な行事が目白押しの一年です。そして何と言っても、わが部署にとっての最大の行事は、「みずき第2号」でもふれましたが、現在の正面玄関左手にある「元臨床治験センター跡地」への移転です。工事の進捗状況にもよりますが、3月の末には移転を予定しています。

病院医療相談部が現在の場所に産声を上げてから4年半が経過いたしました。発足当初から比べると職員も増え、手狭となったために移転することとなりました。しかし、移転の最も大きな理由は、患者様にとって「もっと見える病院医療相談部」を目指すことであります。患者様からのご相談や他の医療機関との連携の窓口として機能を充分に果たすため、この移転を機に、我々自身の「質」、ソフト面の向上にも邁進する所存です。

大学病院、特定機能病院としての役割を果たすべく、今後とも皆様のご指導・ご鞭撻をお願いいたします。

大阪医科大学附属病院 病院医療相談部 病診連携室　〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7
TEL.072-684-6338（病診連携室直通）FAX.072-684-6339